

美學の基礎に就ての考察 (承前)

深田康算

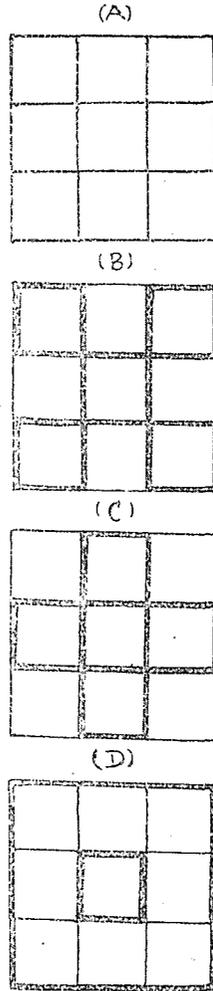
七

美的形像の特殊なる構成を明らかにするに當つて、先づ注意すべきことは、感覺内容が依他的意味を有する場合對象と其自ら意味を有する場合(美的形像)とに於て、其所に現はれる所の感覺的直接的要素と聯想的間接的要素との結合の趣が兩者自ら異なるばかりでなく、直接的要素と間接的要素との夫々が已に異なる姿を示すと云ふ點である。今假りに、與へられたる感覺的與件も同一であり、與へられたる聯想的材料も亦同一であると假定する。さうすれば、是等の要素から形づくられる所の對象と美的形像とは、共に同一の要素から成り立つのであり、唯其要素の異なりたる結合に基いて對象と形像との別が生ずるのであると考へられ易い。然しながら事實は決してさうでない。與へられたる感覺的與件も同一であり、與へられたる聯想的材料も亦同一であると假定しても、吾々が其等に基いて一方に於ては對象を構成し、

一方に於ては形像を構成する場合、此二つの場合に於て、感覺的要素として捕捉されるもの及び聯想的要素として之れに結び附けられる所のものは、夫々已に異なりたる姿を示して居る。換言すれば、對象と美的形像とは、其感覺的與件 *Gegebene Sinnesdata* は同じであると云つても、其感覺的直接的內容 *die unmittelbaren Sinnesinhalte* は同じでない。其聯想材料 *Vorausgegangene Erfahrungen* は同じであると云つても、其聯想的再現 *die Reproduktionen* は同じでない。對象と形像との差異は、單に感覺的要素と聯想的要素との結合の趣の上に於ける差異に基くのみではなくして、感覺的要素と云はるゝものが已に對象と形像とに於て夫々異なるのであり、聯想的要素と云はるゝものが已に兩者に於て夫々異なるのである。尙言葉を換へて云へば、對象と形像とに共通なる同一の感覺的要素と聯想的要素とを假定することは出来る。然しながら此同一なる感覺的要素は、對象の要素として解釋さるゝや否や形像の要素として解釋されるものと異なりたる姿を呈する。其れと同様に兩者に共通であり同一であると思はれた聯想的要素も亦對象の要素たる場合と形像の要素たる場合とに於て夫々異なりたる姿を呈するのである。

シュートマン *Schumann* の研究に依つて知られて居る如く、九個の正方形に區劃され

た正方形(圖A)は、吾々に依つて色々に捕捉される。例へば圖に示す様に四隅に在る四個の正方形の中央に一個の正方形が置かれ、其四邊に沿ふて又四個の正方形が置かれたもの(圖B)、或は十字形を成す五個の正方形の周圍に四個の正方形が置かれたもの(圖C)、或は中央の正方形を取圍む八個の正方形に依つて形づくられる環(圖D)として見られ得る。



是等の場合に於て聯想的要素が其所に働いて居ることは云ふ迄もない。然しながら此所で吾々に取つて重要なことは、其點ではなくして、是等の形が見られたる形として已に色々に變化し、異なりたる姿を呈すると云ふ點である。感覺的興件は同一であるに拘はらず、直接的感覺の内容は異なり得ると云ふことを是等の研究が吾々に教へて居る。之れと同様なことは、總ての視覺聽覺及觸覺の内容に就ても明らかにすることが出來やう。總ての視覺聽覺及觸覺の内容は、其等が色々の意味の關

係の下に置かるゝに随つて、感覺内容として(即ち感覺像として)變化する、而して異なりたる姿を呈する。例へば農夫と保險會社員と植物學者と及び單に散步に出掛けた者とが同じ一つの田園を見る場合に、假りに同一の場所に立ち同一の角度から之れを見るとしても、彼等は見た所のものを概念的に夫々異なりて解釋するばかりでなく、之れを見ることも亦已に夫々異なつて居るであらう。見られる所のものが同一であり、唯其れの概念に據る解釋が異なると云ふべきではなくして、解釋を異ならしめる概念に基いて見るのである故に見られる所のものも亦異なると云ふべきである。而して極めて大擧みに云へば、美的形像とは直接的感覺的なるものが、吾々をして概念に向はしめないで、其自らが強く著しく現はれる場合——即ち依他的意味に取つて重要な個々の諸點が抽出され注意されるのでなくして、感覺的に捕捉される各部分の相互の間及び其等と全體との間の關係が特に注意される場合に外ならぬと云へる。——勿論、例へば橙を美的形像として見る時に『酸』と云ふ經驗が之に附け加はることが明らかである如く、聯想的要素が美的形像に入り込むことは疑ひ得ぬ點である。然しながら其れと同時に、其『酸』と云ふ聯想的要素は其場合に單に形と色(即ち直接に見らるゝもの)に隨從して、云はゞ其餘韻の如きものたるに止

まゐることも明らかであらう。それであるからして、此場合に於ても、美的形像に於ては、直接に見らるゝもの(即ち直接的感覺的なるもの)が強く著しく現はれると云ふことは否定されない。彼の聯想的要素は、一方に於ては美的形像に云はゞ特殊の色合を帯びしめる力を有するに拘はらず、他方に於ては、美的形像が其自ら意味を有し來れる感覺内容たることを妨げ得ないのである。寧ろ聯想的要素に依つて、直接的感覺的なるものは(直接的感覺的なるものとして)多少變化を受ける。斯くして個々の美的形像は夫々特殊なる色合を帯び來るのである。例へば戰場に於ける兵士の群は、之れを美的形像として見らるゝ場合と、將軍が之れを統率する目的の下に見る場合とは視覺像として全く別々である。然しながら美的形像としても、兵士の群は羊の群と同じではない。又例へば一つの繪に現はされて居る大小二個の形の對照は、單なる二個の大きさの對照としても、視覺像として其自ら意味を有するものと(即ち美的形像として)見られるであらうが、其れと同時に之れを遠近を示すものとしても、同様に美的形像として見られるであらう。而して此二つの場合に於ける美的形像は同一ではないとは云へる。又さう云ふべきである。併し遠近として之れを捕捉する場合を指して、美的形像でないとは云はれない。遠近としての捕捉が美的形像な

らぬ場合、例へば或目的の爲めに田園を眺めて其遠近を目分量で測る如き場合に於ては、勿論視覺に現はれた大小の形の對照に基いて判斷するのには相違ないけれども、其對照の視覺像は主要なるものとして止まらない。何故ならば此際吾々は遠方に在るものをも近くに在るものと同じ大きさのものと判斷し評價するのである。而して此判斷が此場合主要なるものとなるのである。又例へば音樂に於て、同一の旋律の強弱二様の反復は、單なる反復若しくは變換として捕捉されるか或は弱い方が強い方の反響として捕捉されるかに随つて、美的形像としての性質は變化する。而して之れを依他的意味に基いて解釋する場合に於ては、音の強弱の差異は音の差異としては意味を持たず、唯之に伴つて聯想せらるゝ空間的距離の差異が主要なるものとなるのである。

以上述べた所からして、直接的感覺内容が對象と形像とに於て如何に夫々異なるか、及び美的形像に於ても其れが如何に多様であり得るか、は明瞭になつたであらう。併し直接的感覺内容が此の如く多様であり得る以上に、其聯想的内容は尙一層多様であり得る。何故ならば諸種の知識領域は即ち諸種の經驗領域であり、一定の判斷に對しては夫々一定の經驗が豫想されなければならぬ。而して聯想的内容は經驗

領域の多様なる丈、即ち判断の種類の多様なる丈、夫れ丈多様であり得るからである。例へば一つの動物を『獵の目的物』*Jagdthier*と認めしめる經驗は、之れを動物學的に規定せしめる經驗と同じではない。其故に其一つの動物の感覺像に結び付き得る聯想的内容は、其等の經驗が多様である如く多様であり得る。

但し、上述の如き特殊な一定の意味に依つて規定さるゝ聯想は多様であり、一々之れを指摘することも出来ないと共に、又必しも常に其等の聯想が總ての場合に美的形像に結び附かなければならぬと云ふ必要もない。寧ろ多くの場合に於ては其等の聯想は意識に上らぬと云つても差支ないであらう。而して美的觀照的態度に於て主要なる地位を吾々の意識に占める所の聯想的内容は、與へられたる感覺像と會て最も屢直接に結び附いた所の經驗——換言すれば、總ての依他的意味の基礎たる空間的物的經驗——であるのが常である。其故に美的形像の捕捉に於て、吾々は云はゞ特殊な専門的な經驗領域から自然的な素朴な世界觀へ——即ち空間に於ける、色ある、雜多なる、物の世界へ——立ち戻るのであると云へる。唯異なる所は、此立ち戻つた立場に於ては、美的形像が破壊されぬ爲めに、吾々は感覺内容其自らの意味に注目すべきであり、物の世界を概念として考へてはならぬと云ふ點にある。美的觀

照的立場の特色たる重要な點は、吾々が色ある物を見る、と云ふことではなくして、物を見る、と云ふことである。Nicht dass wir den farbigen Körper sehen, sondern dass wir den Körper sehen, ist die Hauptsache. 見られた所のものを物としての對象に造り上げる爲めに必要な諸種の經驗は、美的領域に於ては、唯見らるゝものゝ其自らの意味を變化せしめるだけの役目を有するに止まり、美的形像を造り上げる力を有しない。即ち美的形像を規定する條件とはならないのである。

美的形像に入り込み來る所の聯想の主要なるものは、上に云へる如く、空間的物的經驗であるが、併し此の如く物の外的性質を構成するものゝ外に、尙其内部的若しくは精神的性質を構成する聯想的要素のあることを忘れてはならぬ。即ち美的形像は物的空間的性質を有して居ると共に、精神的性質をも具有して居る。此所に精神的性質と云ふのは、快不快や壓迫や緊張等の感じ及び運動の感じ等を指す。是等のものが美的形像に聯想要素として結び付き來ることは明らかであらう。尤も是等の感じは、何人も直接に經驗することに依りて知つて居るに拘はらず、是等の感じを明晰に分解し記述することは困難である。其理由は、之れを分解し記述する爲めに必要なる概念が依他的意味に依つて規定せられて居る故に、直接に經驗せらるゝも

のは概念に對してやはり單なる記號たるに過ぎものとして取扱はれるからである。斯くして直接に經驗さるゝ感情は、感情としては止まらないで、對象に關係せしめられ、概念の形に進まなければ止まぬ所の判斷となる。換言すれば、吾々の直接に經驗する諸種の感情は、單なる感じとして認められずに、或對象に就ての悦びとか、悲しみとか怒りとか不平などとして解釋せられる。而して是等の解釋は即ち判斷に外ならぬのであつて、直接に經驗される感じが消え去つた後にも、尙判斷として其力を保有して居るのである。例へば或出來事は、之れに對する吾々の不快の感じが已に感じとして過ぎ去つた場合でもやはり悲しき出來事として認められる。此の如くにして、直接に經驗せらるゝ感情は、そのものとして吾々の注意には上らずして、唯其れに續いて起る所の判斷の記號としてのみ意味を有するものと見られるやうになるのである。然しながら感情は此の如くに對象に關係せしめられて解釋されるに止まらない。直接に經驗せらるゝ感じ即ち内部的狀態とも云ふべきものには常に必ず結び附いて來る感覺の一種があり、之れを吾々は吾々の身體の概念として客觀化する、而して吾々の身體に就ての感覺有機感覺が與へられる場合には、之れに伴つて是等の感覺到結び附けらるゝ感じも亦其處に現はれるのである。即ち直接に經

驗せらるゝ感じは一方に於ては對象に關係せしめられると共に、他方に於ては吾々自身の身體に關係せしめられる、而して此二つの場合に於ける差異は、美的形像に於ける感情の役目を明らかにする上に大切なる點である。一體感覺内容其自ら意味を有するものとして、美的形像に於ては、外的感覺的性質が強く著しく注意せらるる故に内部的なる性質は自ら注意到上らぬと云へる。併し上に云つた様に、内部的感情的性質が美的形像に具有せられることは否定することが出来ない。其故に美的形像に於ける感情的要素は、云ふ迄もなく、美的形像から當然排除されなければならぬ如き意味に於ての内部的感情的性質ではなくして、其自ら意味を有する所の感覺内容に結び付き得る如き感情でなければならぬ。斯く考へて來るならば、此の如き感情は、對象に關係せしめられた感情であり得ぬこと、吾々の身體の感覺有機感覺に結びつく所の感情でなければならぬことが明らかとなるであらう。尙詳しく云へば、美的形像とは感覺内容が其自ら意味を有することであり、従つて總ての依他的意味に基く所の内容は當然美的形像から排除されなければならぬ。其故に與へられたる感覺像が單に空間的物的聯想を惹起すに止まらず、内部的感情的内容を聯想せしめ再現せしめる場合に於ても、其感情的内容には依他的意味に關係あるものゝ

附隨することを許さない。即ち感情の原因と見做さるゝ對象や感情の終點と考へらるゝ行爲の觀念の如く、直接に經驗さるゝ感情を對象化する所の聯想は、美的形像に内容として結び附くべきものではない。夫れであるからして、美的形像に於て直接的感覺像に結び附く所の感情的聯想内容は、吾々の身體的覺に伴ふ所の感情でなければならぬ。斯くして美的形像に於て吾々の見得る感情は、或物に對しての同情若しくは好惡でもなく、或物に就ての悲み悦び又は怒りではなくして、感情狀態其ものに直接に伴ふ所の身體的なるものである。換言すれば、美形像に感情的性質を附與し得る所のものは、聯想せられ再現せられたる感情的感覺 *Gefühlsempfindungen* に外ならないのである。美的觀照的態度に於ては、吾々は現はされて居る感情を判斷に基くものと見做して、之れに同意を表し若しくは不同意を表するのでもなく、之れと共に苦しみ若しくは之と共に悦ぶのでもなく、又は人の惱むのを見て快を感じたり、人の悦ぶのを見て羨んだり、人の怒るのを見て恐れたりするのでもない。是等の態度は皆依他的意味の領域に屬する感情の解釋に基く。寧しろ是等の感情的判斷 *Gefühlsurteile* 若しくは判斷化せられたる感情の形に解釋される所のもの即ち直接に經驗さるゝ感じ其ものが美的形像に於ては、感覺内容の與件に伴つて、再現する

のである。美學上の考察に於て、所謂内部的模倣と呼ばれる、身體的感覚が美的感情的經驗の重要な要素と見做される所以は此所からして明瞭となるのであらう。

——上述の如くであるからして、美的形像に於ける聯想的要素の中極めて重要な役目を演じて居るものは、身體的(有機感覺的)要素であると云へる。聯想的なる身體的要素は、一方に於て、空間的知覺に於ても重要なものであると共に、他方に於て感情の捕捉に於ても重要なものであり、外部的性質の捕捉と内部的性質の捕捉との兩面に亘つて二重に重要な役目を演じて居ると云ひ得る。依他的意味の領域に於ては、之れに反して、聯想せられ再現せらるゝ、身體的有機感覺的要素は、之れに繼いで起る所の判斷の爲め押し除けられ、其自ら何等重要な意味を持ち得ないのである。

然しながら嚴密に云へば、美的形像に於ては、聯想的要素は直接的感覺的なるものに從屬するものであり、單に之れを多少變化せしめる丈けであつて、其自ら意味を有し得ないことは前に述べた通りである。其故に、若し直接的感覺的なるものが或聯想を呼び起すことに依りて其役目が果たされたとし、呼び起された聯想が寧ろ主要なる意味を有し來る場合に於ては、其聯想的なるものが即ち形像若しくは内容と云

るべきであり、従つて感覺内容其ものは、其自らの意味を失ひ、美的形像は此場合には成り立ち得ぬと云ふべきである。此の如き場合に於ける感覺的直接的なるものの役目は、恰も美的形像を見る爲めに吾々は眼を開かなければならぬとか、或は又何處へか行つて見なければならぬと云ふ如き條件之れは固より無くてならぬ條件には相違ないが、と同様に、單に美的形像の實現し得る條件たるに止まつて、美的形像を規定する上に何等の關係をも有せぬものである。所謂「表現」Ausdruck と呼ばるゝものに於ける感覺内容の役目は此の如きものたるに過ぎない。表現若しくは表情に於ては、見らるゝもの又は聞かるゝものは、唯其れに依つて再現され表現さるゝ處の内容の爲めの媒介者たる役目を有する丈けである。此場合感覺的なるものは、記號たるのみであり、而して再現さるゝ所のものは、判斷若しくは概念に依つて規定さるゝ内容に關係せしめらるゝのである。換言すれば表現若しくは表情の内容と呼ばるゝものは、之れを感覺し捕捉する者へ關係せしめられるか、若しくは推斷された人物に關係せしめられて、始めて意味を生ずることゝなるのである。其故に、吾々は一方向に於ては勿論有機感覺に附隨する感情の再現が美的形像の内容たることを承認すると同時に、他方に於ては此の如き感情的内容が決して美的形像を規定し得るも

のでないこと、即ち内部的模倣や所謂表情が美的形像の本質ではあり得ぬことを斷言しなければならぬ。

從來美學者の多くが此點に關して誤謬に陥つて居つたことは、旋律や繪畫に就ての彼等の記述が大抵皆記述者自身が其等に就て感じた事柄をのみ主として述べて居るのでも分かる。彼等は即ち感情の聯想的再現に依つて表情的内容を得來つた美的形像を、全く美的形像としては經驗せずして、唯吾々の感情を刺戟するものとしてのみ經驗したのであるか、或は彼等は之れを美的形像として經驗したに拘はらず、之れを記述するに當つて、美的形像其ものに就て語る代りに、自己に就てか或は或他の假想的人物に就て語るの誤に陥つたものと云ふべきであらう。一つの旋律に含まれて居る一つ一つの音や節奏は、皆夫々、云ふ迄もなく、吾々が強く又は弱く呼吸する場合歎息する場合或は額に皺を寄せる場合等に經驗する所の有機感覺の聯想的再現を伴ふに相違ない。斯くして一つの旋律は感情的性質を有し來り、表情的となるのである。然しながら若し此の如く旋律に伴ふ聯想的有機感覺に基いて、一つの旋律を例へばと悲しげなるものと呼ぶならば、そは已に聯想的有機感覺を依他的意味に依つて解釋したものと云はなければならぬ。美的形像としての旋律は悲し

げでもなく、又悲しんで居るのでもなく、又之れを聴く吾々が悲しむのでもない。聯想せられ再現せられる處の感覺及び其れに伴つて必然再現さるゝ所の感情は、旋律に多少豊富なる内容を附與することに依つて、其旋律の美的形像としての意味を確定する丈けである。其故に——實は嚴密に云へば、感覺的形像が其自ら意味を有するのである所の美的形像に就て、尙其内部的側面を云々するのは己に不可能なのであるが——美的形像の内部的聯想的感情的側面に就て考察するに當りては、吾々は嚴重に心理學的及評價的概念を排除しなければならぬ。換言すれば、感情を有する者とか、感情の原因たるものとか、或は又感情の向ふ目的とか等の主觀化的、人格化的若しくは對象化的なる概念に捕はれることから脱して、純粹なる現象學的記述に立ち歸らなければならぬのである。

以上述べた所からして、其自ら意味を有する形像を組織して居る要素即ち美的形像の要素が己に、依他的意味の下に解釋された感覺像即ち對象の要素と全然趣を異にすることは明らかであらう。美的形像は對象の姿ビルドであるとか、若しくは對象の見らるゝ一面アンファツクであるとか云ふ丈けでは尙美的形像を正當に記述し得たとは云へない。形像の特殊なる要素の特殊なる所以を記述することが必要なのである。

次ぎに吾々の問題となる所のものは、是等の要素の結合は如何なる姿を示すか、而して其結合より成り立つ所の全體を如何なる一つの言葉に依つて命名すべきかである。此統一の上に於ても美的形像と對象とは夫々大なる差異を示して居る。美的形像の示す統一性は、感覺に於て直接に經驗せらるべきものであつて、之れを他のものへ還元することは出来ない。例へば一つの旋律の含む總ての音を知り、又其等の音の間の時間的間隔を知る者でも、其旋律を直接に聞いたことがないならば、其れを知つて居るとは云へない。其自ら意味を有する所の多くの感覺的内容が、感覺内容として、感覺的直接的に、一體を有するものとして經驗さるゝ時に、始めて一つの美的形像が存在すると云へる。其故に、一方に於ては感覺的直接的に一體を有なすものとして經驗せられぬ所のもの、美的形像とは云へぬと同時に、他方に於ては、若し其所に多くの感覺像があり、其等が其各は其自らの意味を有するに拘はらず、全體の結合としては感覺的直接的に一體を成さぬとするならば、其所には多くの美的形像があるに拘はらず、一つの統一ある美的形像は無いと云はなければならぬ。例へ

ば一つの繪に於て前方の人物と後方の背景との間に感覺的直接的なる統一が無いと假定するならば、其各は美的形像と云へるにしても、其全體が一つの美的形像だとは云はれないのであらう。同様な事は喜劇などに屢挿入さるゝ時事を諷する歌などゝ其劇の全體との關係に就ても云はれ得る。其等の場合に於ては、個々の獨立せる美的形像はある、併し全體として一つの美的形像があるとは云はれない。兎に角美的形像に認めらるゝ統一性は、それが感覺に於て直接に經驗せられると云ふことを其特色とするのである。吾々が形 *Geformt* と普通呼んで居る所のものも、窮極皆此の如き直接なる經驗に與へられる所の形像の統一に其源を置いて居るのである。之れに反して對象の統一性は此の如き統一に基くのではなくして、目的の上に於ける統一の有無に據る。(其故に對象が一つの言葉に依つて代表せられ得る様に、對象の統一も亦一つの語若しくは一つの文章の統一に依つて代表せられるのである)。換言すれば音や色や味や香等の如く夫々異種類に屬する感覺も、概念の意味(即ち目的)の上から見て同じ一つの價值を有する場合には、一つに統一せらるゝことが出来る。何故ならば、其場合は等の感覺は唯標號たる意味を有するに止まるのであるからして、若し一つの對象を指し示す役目を果すと見做さるゝならば、是等のもの其自身は

假令感覺としては結合せられ得ぬに拘はらず、一つの對象を指し示すと云ふ點で統一せられ得るからである。

對象に於ける統一性と美的形像に於ける統一性とが同じく無ないこと、寧ろ互に背反するものなることは、前に擧げた繪及び喜劇の例に於て、人物と背景との間に、又劇全體と歌との間に、形像としての統一は無いに拘はらず、對象(若しくは論理的概念的意味)の上に於ける統一は有り得ると云ふ事實から明らかである。此差異若しくは背反を尙一層明らかにする爲めに、吾々は次の例を擧げたい。例へば吾々が窓に椅つて上半身丈けを現はして居る人物を見るとする。此感覺像は人間と云ふ概念から云ふならば、云ふ迄もなく不完全であり、全身を指し示めず名詞を想ひ起すことに依つて始めて完全なるものとなり得るであらう。併し夫れと同時に此感覺像が——單なる空間的形としてではなく、やはり人間の形として、換言すれば人間なる意味を附け加へる所の聯想を排除することなくして——感覺像として若し統一を示すならば、感覺的統一を示すならば若しくは見られたる形として一つの全體であるならば、それは此意味に於て一つの全體と云ふべきである。概念的には斷片である所のものを、吾々は全體として見るのである。又例へば或人物の傳を物語る小説が其生

涯の終りに至らないで終るとする。其場合其人物の生涯から云ふならば無論其所で終るのではない、併し其小説としては、美的形像としては其れが完結なのである。其生涯は斷片ではあり得ぬに拘はらず、其物語は斷片で濟む。さうであるからして、一部分に就ての感覺的捕捉は必しも部分的なる不完全なる捕捉ではなく、全體に就ての感覺的捕捉は亦必しも全體のなる完全なる捕捉ではない。對象の統一の爲には、部分的なる不完全なる感覺的捕捉が已に十分であり得ると共に、美的形像に必要なる全體のなる完全なる感覺的捕捉が、對象の統一の爲めには不十分であり得る。美的形像は、其故に感覺的に捕捉さるゝ要素が感覺的直接的經驗に於て一つの全體に結合する場合に於てのみ、従つて其要素が其位地を轉換し得ぬ如き順序に置かれて居る場合に於てのみ、存在すると云はなければならぬ。而して此の如き一つの全體に結び付き得る聯想的內容のみが美的形像に屬するものと云はなければならぬ。而して又此の如き一つの全體である所の美的形像を指示し命名し得る言葉は、當然此の如き感覺的結合を云ひ現はし得るものでなければならぬ。吾々が美的形像としての旋律や劇の概念を定義しようとする時に、時間的繼起に於ける結合の有様を規定することが重要であり、又美的形像としての風景や *intention* の概念を定

義しようとする際に、其空間的配列に於ける結合を規定することが重要であるのは、即ち此故である。

上に述べた所から明らかになることは、内容を以て感覺的なるものに依つて媒介せらるゝものとし、形式を以て此内容の現はれ方と見做す意味に於て所謂内容と形式との區別を云ひ得る所には、美的形像が存在せぬと云ふ事である。何故ならば美的形像に於ては感覺的に捕捉さるゝ所のものが即ち其内容たるに外ならぬのであつて、美的形像たる爲めには其自らとして獨立の統一のあることが必要なのであるからである。美的形像を、上の意味で云ふ形式と内容との區別に基いて記述することは、美的形像を破壊する所以であり、形像を對象的なるものゝ記號たらしめる所以である。

九

上來の論述中吾々は常に、多くの感覺内容が言葉に依つて概念的に代表せられ得る一つの對象に關係せしめらるゝ場合は畢竟科學的認識の領域に屬するものなること即ち美的意味の領域ではないことを述べた。夫れであるからして、吾々の見解

は、恰も語及文章に依つて云ひ現はされる處のものを盡く皆一般的概念的なるものと見做すものであり、言語及文章は全然美的意味を有し得ぬと考へるものではないかと云ふ疑が起るかも知れない。然しながら語及文章が美的意味を有し得ることは詩及小説が美的意味を有する事實に依つて證明せられて居り、吾々も亦決して言語は唯一般的なるものゝ記號たるに過ぎぬと云ふのではない。此點を尙十分に明らかにして置きたいと思ふ。

語及文章から成り立つて居る所の詩や小説が美的意味を有するは何故であるか。美的形像が感覺内容其自ら意味を有することであり而して言語が單に或意味を代表する記號たるに過ぎぬとするならば、語及文章は如何にしても美的形像たることは出来まい。又言語が美的意味を有し得る事實を説明する爲めに、語及文章の視像若しくは聽覺像が其自ら意味を有するのである、換言すれば言語の音調や文字の形が詩及小説の美的意味を形づくるのであると主張するならば、それは明らかに無理なる説明であると云はなければならぬ。吾々の見る所に依れば對象が一つの言葉に依つて代表せられるのは、云ふも迄もなく、對象そのものが言葉に現はれるのでなくして、言葉は之れを代理するのである。尙詳しく云へば、對象そのものは何處に

も與へられて居るのでなく、與へられて居る種々なる現はれに基いて吾々が之れを推斷する、而して斯く推斷された所の對象を指示する爲めに言葉が用ゐられる。さう云ふ意味に於て、言葉は對象の代表者たり代理者なのである。而して恰も之れと同じ意味に於て、言葉は對象の感覺的現はれの代表者たり代理者であると云へる。對象が(概念として)言葉に依つて代表的に與へらるゝ如くに、對象の感覺的現はれも亦言葉に依つて代表的に(感覺内容として)捕捉せられると云へる Genaun so, wie das eine Objekt, das wir aus mannigfachen gegebenen Erscheinungen immer nur erschliessen können, das selbst aber nie gegeben ist, doch durch das Wort vertreten und so vertretungsweise gegeben sein kann, so kann es auch vertretungsweise wahrgenommen werden, sobald eben das Wort gehört oder gelesen wird. 言葉が概念としての對象を代表する有様と、言葉が對象の感覺的現はれ、若しくは感覺内容としての對象を代表する有様とは、全く同様なのである。其故に一方に於て、言葉は對象を代表する若しくは意味すると云ひ得るならば、夫れと同時に他方に於て、言葉は對象を推斷せしめる土臺である所の種々なる現はれ、即ち感覺内容をも代表する若しくは意味すると云はなければならぬ。對象とは感覺内容を離れて存在するものでなく、感覺内容に基いて推論せられた結果なのである故に、對象を指示

し代表する所の言葉は又當然感覺内容をも共に指示し代表するのである。従つて一つの言葉を聞き又は讀む際には、吾々は一方に於ては之れを概念的に對象に關係せしめ得ると同時に、他方に於ては、之れを感覺内容を代表し意味するものとして捕捉し得る。而して後の場合に於て言葉の意味し代表する即ち言葉に依つて與へられる感覺内容とは、即ち其言葉が概念的に意味する對象の感覺的現はれ換言すれば、對象を推斷せしめる土臺たる感覺内容に外ならないのである。斯くして言葉は感覺内容を意味し代表し得る。若しくは一つの言葉には其意味する對象が含まれて居ると共に、其對象の感覺的表現も亦含まれて居ると云へる。尙云ひ換へれば、言葉は吾々をして直接に感覺内容を捕捉せしめ得ると云ふべきである。

夫れであるからして、言葉そのものに感覺内容が無いと云ふことは出來ない。言葉の内容意味は聯想に基く故に、言葉には感覺内容が無く、従つて語及文章は美的意味を有し得ぬと云ふべきではない。又語及文章の美的意味は感覺内容其自ら意味を有することに基くのでないと云ひ、或は又其美的意味は、美的形像が感覺内容其自ら意味を有するものたる以上、單に語及文章の音調及形の上にのみ成り立つと考へることの誤なるは明瞭であらう。言葉が吾々をして直接に感覺内容を捕捉せしめ

得る點に於ては、言葉と他の感覺内容との間に何等の差異はない。言葉は他の感覺内容と同様に一つの感覺内容である。唯他の感覺内容例へば視覺像、聽覺像等と言葉との異なる點は、他の感覺内容に於ても固より聯想及び再現的要素を必要とするが、言葉に於ては感覺的に興へられたるもの(感覺的形式若しくは感覺的要素)其自らは殆んど全く意味を有しないで、言葉の語義を理解し得る爲めに必要なる經驗及聯想の助けに依り始めて其十分なる内容を得來ると云ふ點である。換言すれば聯想的要素の重要さが言葉に於ては比較的其の極度に達して居る云ふ丈けに過ぎないのである。其故に他の感覺内容が依他的意味に依りて解釋せられ得ると共に其自ら意味を有し來り得る如く、言葉も亦依他的意味に依りて解釋せられ得ると共に其自ら意味を有し來り得る。例へば見られたるもの又は聽かれたるものが吾々に其名を想ひ起さしめるべく迫る場合而して此の如き主として概念的に解釋せらるる言葉に依りて始めて其意味を得來る場合に於ては、視覺像又は聽覺像は依他的意味を有する。之れに反して視覺像又は聽覺像が其自らとして意味を有する場合は、已に述べた如く、美的形像なのである。言葉も亦夫れと同様に一方に於ては依他的意味に基いて解釋せられ得ると共に、他方に於ては其自ら意味を有し得るのであり、

而して其場合に美的形像となるのである。言葉には聯想的內容が重要な要素をなして居るが其故に言葉は常に依他的意味のみを有すとは云はれないことを注意すべきである。言葉が吾々に直接に感覺内容を捕捉せしめる、若しくは言葉が一つの感覺内容であるとすれば、それは感覺内容たる以上、或場合には依他的意味を有すべく、或場合には其自らの意味を有し得べきである。

而して言葉が其自ら意味を有し得る爲めには、唯他のものへ關係せしめられぬと云ふことが必要なる丈けである。依他的に解釋されぬこと、依他的意味を有し來らぬと云ふことが必要なのである。例へば言葉が正しいか誤つて居るかと云ふ點から評價さるゝ時。言葉の現はす感覺内容が他の感覺内容と關係せしめられ比較されて、之れに該當するや否やが注意さるゝ時は、言葉は其自ら意味を有すとは云はれない。此點から云へば、言葉が其自ら意味を有し得る場合は、其れが唯理解さるゝ丈けであつて評價されぬ場合だと云ふことが出来る。其故に若し吾々が一つの言葉を理解する爲めに、先づ其言葉が意味し若くは代表して居る所の感覺内容を想ひ起す必要を感ずる場合或は少くとも先づ其言葉の意味を明瞭に想ひ浮べなければならぬ如き場合に於ては、其所には單なる理解があるのではなくして、他のものへの關係

他の者に基いての評價がある、従つて言葉其自ら意味を有する場合とは云はれない。一體總ての言葉は皆始め先づ他の感覺内容の上に基いて其内容を得來る(例へば樹と云ふ語は、樹の視覺内容に基いて其内容を得る)即ち Sinnvoll となる。而して其等の感覺内容が組み込まれて居る所の系列へ組入れられることに依て——換言すれば、上の例に就て、樹なる視覺内容が見らるゝ世界に於て如何なる地位、如何なる意味を有するか、其れを樹なる言葉が又意味し代表する事に依つて——其意味を得來る、即ち bedeutungsvoll となるのである。言葉の理解は其故に上述の如く他の感覺内容と感覺的系列とに基いて言葉に其内容と其意味とを結び附けることに依りて始めて生ずる。斯くして言葉は或他の系列を代表する一つの系列となり、而して該系列に關係せしめらるゝことに依りて理解さるゝのである。然しながら其始めに於て此の如き手数を要する言葉の理解は、漸次に、必しも一々他の感覺内容や、其れが組み込まれて居る感覺的系列の觀念を呼び起すことなしに、行はれるやうになる。斯くして言葉は直接に理解さるゝに至る即ち其自らとして獨立せる系列となり得るのである。而して唯言葉の評價(即ち正しいか否か)の爲めにのみ他の感覺内容や感覺的系列の想起が必要となるのである。それであるからして、若し言葉の具象性 Anschaulichkeit

clar Worte が言葉を理解する爲めに必要である所の聯想及經驗を一々感覺的に明瞭に想ひ起さしめることであるならば、具象性は言葉に其自ら意味あらしめる所以でなく、従つて美的意味を有せしめる所以でないと云はなければならぬ。此の如き意味に於ては、言葉は具象的ならざればならざる程美的なのである。感覺的に活き活きとした具象觀念を呼び起すことは、言葉其ものをして其自らの意味を失はしめることなのである。——加之若し假りに一々の語一々の文章に就て具象的觀念が呼び起さるることが必要であるとするならば、其際呼び起さる所の觀念が如何に混亂を極むるであらうかと云ふことは想像するに難くない。例へば一つの語の呼び起し得る所の具象的觀念は無數に有り得る、而して其孰れか一つが恰も今必然呼び起されなければならぬと云ふ理由は與へられて居ない。而して若し假りに一々の語に夫々或一定の具象觀念が伴ふとするならば、其際には一語の呼び起した具象觀念は、他語の呼び起した其れと何等必然の關係を示さぬであらう、従つて具象的觀念の雜然たる野合が其結果として現はれるに止まるであらう。何故ならば一語が或一定の具象的觀念を呼び起すべき必然の理由は全くないからである。夫故に言葉の具象性と呼ばるるものは、實は言葉の特色若しくは其長所を破壊するものと云は

なければならぬ。或一定の目的の上に基く統一の爲めに、感覺的現はれの無限に數多くある中から感覺的に統一あるものを造り上げ、又此目的の爲めに重要なものを選び出すことが言葉の特色であり、而して又其長所である。此長所は具象觀念を呼び起すことに依つて破壊されなければならぬ。——言葉が其自ら意味を有し従つて美的形像たり、美的意味を有し得るのは、寧ろ其れが云はゞ内容と意味とを惠んで呉れる處の感覺内容や感覺的系列の中へ直接に入り込むことに依つて、其等のものを不必要ならしめ、自ら完全に其等のものに代り得る場合であると云ひ得る。換言すれば、言葉の系列が他の感覺内容に基く系列若しくは經驗の系列に代つて、其自ら獨立の系列となる場合である。之に至つて、此系列は經驗的内容に依つては規定せられず唯純粹に言葉そのものの結合に依つて規定せられる。其故に若し一つの文章が其中に含まれて居る語と語との間に矛盾なしと感ぜられ、後なる文章が前なる文章に依つて必然に規定せられると見られ、又全體が必然的なる關係を示すと認められるならば、此の如き言葉の結合は即ち其自ら意味を有し來れる言語形像と云ふべきであらう。

要之、美的言語形像とは——勿論他の總ての美的感覺内容に於けると同様に、依他

的意味即ち對象の場合と異り、感覺的側面が重要なる役目を有しては居るが併し——言葉の音調及節奏等に依て（例へば音樂に於ける如く）其意味を有するのではなく、其意味は、言葉を理解する爲めに必要なる先きに在りし經驗に依つて規定せられるのであり、又其結合の有様は此意味に依つて規定せられるのであるに拘はらず、是等の經驗に完全に代り得るに至つた所の言語的結合に外ならない。（未完）